

2011 年度 非文字資料研究センター 第 1 回公開研究会

京城の都市・建築そして生活

期 間：日時：2011 年 12 月 16 日（金） 13:00～16:30

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16 号館地下 1 階 視聴覚 B 室

報 告：富井正憲（漢陽大学校工学大学 建築学部 教授）
車 惠英（漢陽大学校国際文化大学 韓国語文学科 教授）
金 容範（神奈川大学工学研究所 客員研究員）

コメンテーター：

朴 贊勝（漢陽大学校人文大学 史学科 教授）
吳 秀卿（漢陽大学校東アジア文化研究所長）
大里浩秋（神奈川大学外国語学部 教授）

はじめに

2011 年 12 月に韓国・漢陽大学校東アジア文化研究所と本神奈川大学非文字資料研究センターとの部局間による学術交流の提携が結ばれた。これを記念して 2011 年 3 月にソウル市清溪川文化館および同年 10 月に駐日韓国大使館東京文化院で開催された展覧会「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」を、短期間ではあったが、本学でも開催した。

韓国と日本は、戦前期の不幸な関係があり、これまで韓国国内では戦前期の様々な植民地政策に関連する都市文化研究を行うことは難しく、とりわけ、当時の日本人らの評価を伴う分析やその公表はまだまだ多くの抵抗が見られる。こうした中で、漢陽大学校建築学部韓東洙氏・富井正憲氏の両先生を中心とした研究会の研究成果による本展覧会は、当時のソウルを代表する繁華街として日本人の南村（ナムチョン）の本町と韓国人の北村（ブッチョン）の鐘路（チョンノ）という 2 つの街並みを復元し、その魅力的な都市・京城の様相を蘇らせた画期的なものであった。この展覧会は、韓国で、ソウルを「京城」と表記した初めてのものでもあり、その内容は、まさしく、今後の日韓の新しい研究関係の構築の必要性を示すのにもふさわしいものであった。

この注目すべき展覧会の開催期間中の 12 月 16 日に、その内容を受け「京城の都市・建築そして生活」と題して 2011 年度神奈川大学非文字資料研究センター第 1 回

公開研究会を開催した。パネラーは、漢陽大学校側から富井正憲氏（漢陽大学校工学大学建築学部教授）、車惠英氏（漢陽大学校国際文化大学韓国語文学科教授）の 2 名と神奈川大学側から金容範氏（神奈川大学工学研究所客員研究員）の 3 名の諸先生にお願いし、併せて、漢陽大学校側から朴贊勝氏（漢陽大学校人文大学史学科教授）、吳秀卿氏（漢陽大学校東アジア文化研究所長）および神奈川大学側から大里浩秋氏（神奈川大学非文字研究資料センター副センター長）の 3 名の諸先生にコメンテーターとしての参加をお願いした。研究会は、内田青蔵（非文字資料研究センター研究員）の司会により、神奈川大学非文字資料研究センター長田上繁氏の挨拶から始まり、パネラー並びにコメンテーターの魅力的な発表が続き、参加者も大いに満足したものであったと思われる。本稿は、この研究会の概要である。



公開研究会の様子

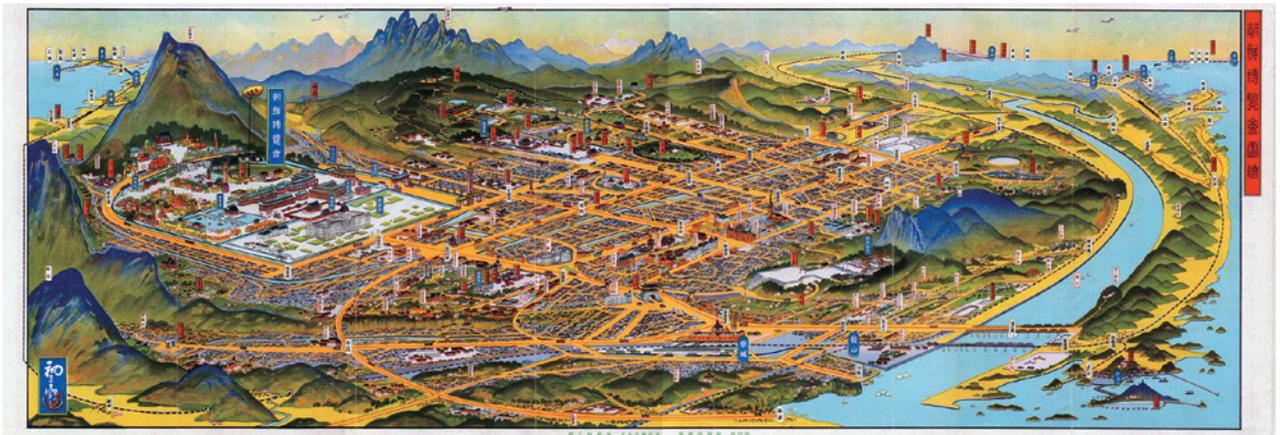


図1 1929年の吉田初三郎の描いた鳥瞰図

富井正憲氏による「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」について

最初のパネラーである富井正憲氏は、今回の学術交流の提携を記念して行った展覧会「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」の担当者であり、展示品の収集・分析も担当されている。そこで、そうした作業過程を含め、展覧会の内容の紹介を通して、1930年代の京城の都市と建築について報告された。

富井氏は、作家梶山季之の『京城昭和十一年』を読み、詳しい地図があれば京城という都市をより深く理解できると、1930年代のソウル研究を開始した動機を述べている。今回の展覧会は、特徴として、①「京城」という言葉を冠した初めての日韓両国の重要な展覧会であること、②1930年代の一般市民の都市生活と文化に焦点を据えていること、③「比較」をキーワードとし、市民と観光客による人間比較、「鐘路」と「本町」による朝鮮人商店街と日本人商店街の空間比較、1940年の「京城」フィルムによる現代との時間比較、④地図・図面・映像などによるビジュアルな展示構成、の4点が挙げられるという。こうした特徴を端的に示すひとつが、1929年の吉田初三郎の描いた鳥瞰図である（図1）。吉田初三郎は、そこに近代的な都市・京城をダイナミックに描いている。これは、1929年9月に開始された朝鮮博覧会の様子を描いたもので、内地からの見学者、あるいは朝鮮半島の地方都市からの見学者たちが、この地図を片手に京城を探索したのだという。朝鮮総督府は、朝鮮神宮、総督府庁舎、京城府庁舎そして京城駅を完成させ、いわゆる植民地時代の主要建築と都市インフラを完成させていた。そのため1930年代は、そうしたインフラをもとに、

多くの人々が京城に集中し、都市生活そのものも大いに発展した時期と捉えることができるという。

展覧会で展示された最大の成果物は「鐘路」と「本町」の復元地図である。この地図には、韓国人の“銀座”と日本人の“銀座”とも称された2つの通りの両側に、どのような店舗が並んでいたのかを詳細に明らかにしており、当時の繁華街の風景が復元されている。その復元は、様々な資料の収集と分析の結果であるという。すなわち、地番入りの地積図がないため、1917年・1927年発行の「京城府管内地積目録」、「京城地形明細図」を基本に、街路・街区図を作製し、京城の歴史書・案内書・便覧などから各街区の利用状況・土地所有者・価格などを、同様に、電話番号帳、商工名録、絵葉書あるいは広告などを用いて街路の商業構成と商店街地図を作製した。その結果、鐘路通りでは1439件、本町の新町通りでは1725件の商店の商号・氏名・国籍・業種・地番などの入ったデータベースができ、それをもとに繁華街が復元されているのである。建築に関しては、朝鮮建築会の機関誌『朝鮮と建築』（1922 - 1945年）を主資料としている。そして、作製した復元地図は、「京城日の出会」（日の出小学校同窓会）などの京城で幼年期を過ごした人々の記憶をもとにチェックを受けるなどの修正を行い、完成したものである。

また、会場におかれたスクリーンを通して1939年に製作された清水宏監督「京城」（松竹株式会社所蔵）が流された。当時の京城の都市と人々の姿が映された「京城」は、貴重な都市文化研究の非文字史料でもあり、今後のこうした映像資料の分析はもちろんのこと、他の都市との比較研究などの可能性も指摘された。いずれにせよ、展覧会を通して紹介された京城の都市と建築の研究



は、ようやく開始されたばかりであり、今後、都市や建築の研究者はもとより、映画、文学、経済などの他分野の研究者も含め、様々な豊かな研究へと発展することを期待したい、として報告を終えた。

車恵英氏による雑誌『別乾坤』に描かれた「京城」について

車恵英教授は、最初にこれまでの植民地の近代都市「京城」と韓国の近代性に関する研究の観点について整理し、これまであまり重視されてこなかった観点としての「当時のソウルに生きていた人々が認識したソウルと、その表象とは何か」をテーマとして報告された。

史料として用いた雑誌『別乾坤』は、1926年から1934年まで刊行された雑誌で、その発行目的は、いわゆる民族独立・国権回復の啓蒙をめざしたものではなく、軽い読み物を提供した新しい雑誌であったという。すなわち、この雑誌が発行された1926年は、前年の治安維持法による思想統制及び言論統制が強化された時期でもあった。一方、この時期は、新しい都市インフラとしての朝鮮神宮や京城駅が竣工し、また、朝鮮博覧会の開催とともに日本資本の三越などの百貨店が進出し、ショッピングや映画・カフェなどの魅力的な娯楽性の高い都市文化が持ち込まれた時期でもあった。こうした光と影の両方が持ち込まれた時代の中で、雑誌『別乾坤』は、京城の歴史、植民地前後の変化の様相、京城の表と裏、長所と短所、生産と退廃などを俯瞰し、そうした都市全体のありのままの姿を探査し記録するために京城特集を展開していたという。そこには、リアリズムとしての京城の全体像を捉えようとする姿勢が顕著に表れていた、として報告を終えた。

金容範氏による「近代京城の生活」について

金容範氏は、近代都市住宅として出現した都市韓屋（ハンオク）を取り上げ、その建設背景と平面構成の特徴、生活の様子について報告された。

都市韓屋は、「都市型韓屋」、「改良韓屋」、「近代韓屋」、あるいは「ジッチャンサジプ（商人の建売住宅）」と称され、それぞれの名称が、この都市韓屋の特性を端的に示しているという。すなわち、「都市型韓屋」は都市部に建つというその立地を示しており、「改良韓屋」はその建物が伝統に基づきつつ新たな機能や生活に則して改良されたものであることを示している。また、「近代韓屋」は、近代という新時代に建てられた建物であること

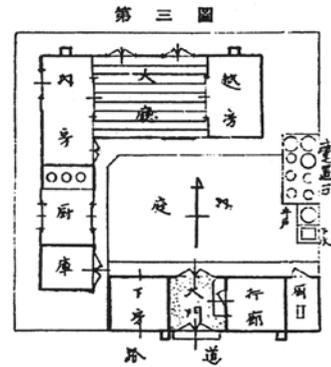


図2 建築家朴吉龍のスケッチに見られる京城の都市韓屋の平面形式（『朝鮮と建築』1941年4月号）

を示し、「ジッチャンサジプ」はその供給者が中小規模の住宅会社の業者の造るものであることを示しているという。

京城では、都市韓屋は1920年代に出現した。現在の都市韓屋の保存地区として知られる北村（ブッチョン）は、かつては王族らの両班（ヤンバン）と高級官僚らの住宅地であったが、1910年代から行われた市街地整備と1930年代の「朝鮮市街地計画令」により嘉会洞（カヘイドン）などの高級住宅地の細分化が一層進められ、都心部の高級住宅地は次々と中小規模の都市韓屋用に変貌していったという。都市韓屋は、不特定の居住者に対応できるように、釜屋（台所・ブオク）、内房（アンバン）、大庁（板の間・テーチョン）、越房（コンノンバン）からなるL字型の内棟（アンチェ）と大門間（ムンカンバン）と便所などからなる一字型の門間棟（ムンカンチェ）の2棟が内庭（アンマダン）を取り囲むようにコの字型に配されるのが一般的であった（図2）。この動線的にもホールのようなでもあり、台所と連続した多目的な家事空間でもある内庭を中心とする配置は、韓国の伝統的な住み方を維持しようとする意識の表れであり、その形式は京畿道（キョンギド）地方の民家に類似しているという。

各部屋の使われ方は、内房は夫婦寝室で、寒い季節は家族の食事・団らん・親戚のもてなしにも使われた最も格の高い広い部屋で、ほとんどの生活がこの部屋を中心に行われた。越房は、子供室や若夫婦の寝室として使われた。また、暖かい季節には、板の間の大庁が内房の機能の代わりに場として使われた。ただ、都市韓屋では、本来、開放されていた大庁の内庭側にはガラスを用いた建具が入るなど室内化され、また、洋家具も配されるなど生活の近代化が進められていたという。こうした都市韓屋は、戦後になると、釜屋（台所）の床土化、そして

LDKへと進み、また、内房の個室化、内庭の室内化など、西欧のライフスタイルの導入の中で変貌を遂げていることを指摘し、報告を終えた。

3名のコメントについて

3名のパネラーの報告後に、朴賛勝氏、吳秀卿氏および大里浩秋氏の3名にコメントを頂いた。

朴賛勝氏は、3名の発表に対する直接的な質問ではなく、歴史学者の立場から植民地時代の京城の見方について、簡潔に報告された。すなわち、1920年代から30年代の京城は植民地朝鮮の首都であり、日本の植民地支配の政治的中心地として変貌を遂げていた。その姿を見る時、この植民都市として基本的な性格を常に意識して考えるべきであるという。つまり、京城が見せている近代性は、植民地としての近代性であり、日本人が企画・演出し、朝鮮人を観客とする芝居のようなものといえる。それは、植民地本土の文化が、植民地にどのように移植されていくのかをよく示す事例ともいえる。そうした京城の見方があることを指摘された。

吳秀卿氏は、現在、芸術劇場として再利用されている、当時の本町に建てられた映画館である明治座に注目され、その利用の経緯を通して、近代と現代を継続的に見る視点について報告された。すなわち、1934年に竣工した明治座は、3層構成からなるバロック様式の建物で、戦後は国際劇場と改名され映画館として利用され続け、その後ソウル市の施設となり、1961年からは国立劇場に改名された。ただ、植民地時代の建物を国立劇場として使うことに対する批判があり、1975年には民間に売却され金融会社として使われてきた。その後、文化人たちがこの建物の重要性を主張し、再び2003年に文化的観光的立場からの再利用が決定し、明洞芸術劇場として内部はリモデリングされ、今日に至っているという。歴史の反省と思い入れによりリニューアルされた明洞芸術劇場を通し、記憶を遡ることは未来へと向かう望みを持っていること、を指摘された。

最後の大里浩秋氏は、コメンテーターとして、いくつかの質問と感想を述べられた。すなわち、富井氏については、上海や天津などの日本人町と京城との違い、また、提示された京城の様子が、具体的に1930年代の内容を示しているのか、あるいは、戦前期の京城全体の様子を示しているのか、時間の経過での変化があるならば1930年代の京城の特徴はどのようなものであったのか、

と質問された。これに対して富井氏は、植民地としての京城と租界として上海とは大きく異なるものであるとし、具体的には、朝鮮王国の首都の上に、植民地時代のレイヤーが重なり、その上に現代のレイヤーが重なっているのがソウルであるのに対し、上海などの中国の日本人町は、新しい部分として造られた町という違いがあること、また、京城の復元では基本的には1927年に都市計画を進める際に行われた調査資料を基本史料としていることを答えられた。

車氏に関しては、扱った雑誌『別乾坤』と他の雑誌との内容の違いについての質問と、また、中国でも日本の侵略期の雑誌や新聞の誌面の変化は意味ある研究となるかもしれないという感想を述べられた。これを受け車氏は、雑誌『別乾坤』が特別な雑誌で、当時の京城の全体像を把握しようとする試みは、この雑誌だけの傾向であったと答えられた。

金氏に関しては、京城に住んでいた日本人の住まいの様子についての質問が出された。金氏は、植民地時代初期の日本人は、材料をすべて日本から持ち込んで住宅を建てて住んでいたが、冬の寒さが厳しく、その後はオンドルの導入などの改良が行われ、また、様式的には本土で流行していた洋風住宅が主流となっていく傾向が認められると答えられた。

(内田 青蔵 非文字資料研究センター研究員)



左列：上から 富井正憲氏、金容範氏、吳秀卿氏
右列：上から 車惠英氏、朴賛勝氏、大里浩秋氏